

「家庭科教育」への取り組みについて

青森県立三戸高等学校教諭 諏訪 節子

1. はじめに

教職経験17年目を迎えた。ここでは、これまでに校内及び校外において「家庭科」として行ってきた取り組みを紹介する。特に「家庭一般」の中で扱ってきた内容を詳細に紹介しながら、来年度から実施される新学習指導要領施行に向けて、家庭科教育のより効果的なあり方を検討する。

(今年度の人事異動により勤務校が変わったことから、ここで紹介する実践例は昭和63年度～平成13年度までに青森県立田子高等学校において実施してきた内容である。)

＜教育課程概要＞

当該高校は、全校生徒数が200人に満たない小規模校である。学年2クラス、6学級編成。純朴な生徒が多いが、生徒指導上・家庭生活上のさまざまな問題を抱えた生徒も増えてきた。

「家庭一般」は1・2年次分割履修。2年次からのコース選択制により、家庭科目を選択する生徒が15名前後である。「食物」、「被服」をそれぞれ6単位履修。平成9年度までは「保育」もあった。

学校全体として、家庭科に対する理解・協力体制が整っており、家庭クラブ総会や校内家庭クラブ校内研究発表会(大会出場リハーサルを兼ねる)などの際は、全校をあげての対応がある。また、学校家庭クラブの活動についても大変協力的である。

家庭科を通して、生徒の変化変容価値を認めていただく機会も多かった。

2. 「家庭一般」における実践例

家庭科の授業においては、いわゆる「教科書」のみの授業に留まらず、常に情報収集を心がけ、授業を受ける生徒の実態にあうような指導方法を試行錯誤しながら行ってきた。

「家庭一般」の授業において、外部機関と関わりながら実施してきた事例のみを以下の様式により説明する。

- ①教科・単元名・配当時間
- ②関係機関(関係管轄、連絡調整した団体など)
- ③実施場所(どこで実施したか)
- ④実施内容(目標や具体的な内容・取り組み方法)
- ⑤生徒の反応(どのような変化変容が見られたか、生徒の感想など)
- ⑥備考(評価・反省・課題等)

全国高等学校家庭科技術検定食物調理4級

- ①家庭一般 食物分野 3時間
- ②文部科学省
- ③調理室
- ④ア. 切り方(半月切り・小口切り等) イ. 計量(水や調味料の計量) ウ. 食品の目測 エ. 基礎知識(筆記試験)

＜実施目的＞調味、購入量、炊飯、切り方、緑黄色野菜のゆでかた、煮出し汁のとり方、食品と栄養素、調理器具、基本的調理法の要点がわかる。

- ⑤家庭において「台所に立つ」「包丁を握る」とい



った生活経験が乏しい生徒達にとっては、“包丁で何かを切る”こと自体が新鮮な感覚のようである。例えば、4級検定実技問題の「きゅうりの小口切り」などでは、目標枚数（30秒間に40枚以上）を告げると、不安ながらも挑戦しようとする意欲が沸くようであり、どの生徒も真剣な態度で合格を目指すようにな変化変容が認められる。

⑥1クラス40人（実習班8班）の授業において練習に1時間（50分）、試験に2時間を充てた。試験の際には受験者以外の生徒に別室待機をさせ、1テーブルに1人がつくようにした。待機の生徒には、筆記試験内容についての自習をさせている。目標枚数を切ったという達成感を短期間の内に経験でき、また「資格取得」もできることから、授業に取り入れることに多大な意義を感じている。

全国高等学校家庭科技術検定被服製作4級

①家庭一般 被服分野 6時間

②文部科学省

③被服室

④基礎的な縫い方の要点がわかる

手縫い（並縫い・半返し縫い・まつりぐけ・ボタンつけ）ミシン縫い（直線縫い・曲線縫い・角・端ミシン等）。

⑤家庭においても被服製作をする機会がほとんどなく、「ほころびたら捨てる」生活をしている生徒たちにとっては、針・糸・はさみ・ミシン・アイロンを使用することに対する不安の声が多かった。

「自分がイメージしていたよりミシン縫いがうまくできなかった」「なかなかうまくいかない」「指ぬきを初めて使った」「針の持ち方を聞いたとき、変な感じがしたけど練習していたら使いやすくなった」などが生徒の声である。

⑥「難しい」と思うことでも挑戦・経験することによりこれまでの不安が払拭された生徒がほとんどの

ようであった。ただ、苦手なものに対する意識の仕方は生徒それぞれであり、生徒のより細かな個性を掴むことができる（生徒指導に生かすことができる）のが被服教材の特徴の一つであると思う。

思春期保健教室

①家庭一般 保育分野 1時間

②三戸地区保健所（現「八戸地区保健所」管轄）

③特別教室（約80人収容）

④八戸の産婦人科医師から性に関係する病気や人工妊娠中絶などについて詳しく説明を聞いた。

講演やスライドを通して同年代の実態や考え方の未熟さを学び、各自どうあるべきかを考える機会とする。

⑤はじめは興味本位で授業を受けようとするものが多かったが、専門医から話を聞くことにより、真摯な態度に変わっていった。自分の身体について学習する機会を貴重なものと受け止める生徒が増え、また男女ともにお互いの性の認識を深めたようである。

⑥この企画は、町の健康福祉課（保健婦）に相談したところ、保健所の事業（「無料」で専門家の話を高校生にという推進事業）としてこの企画があることを知り、タイアップしての実施となった。

町内独居老人への年賀状

①家庭一般 学校家庭クラブ 1時間

②田子町社会福祉協議会

③校内（各教室）

④町内の独居老人へ年賀状を書いて送る。家庭一般の期末考査終了後（授業に身が入らない時期?）に、社会福祉協議会とタイアップし、メッセージを入れた手作りの年賀状を作成し、発送する。

年賀状を受け取った高齢者からはあたたかな返事も届き、ほのぼのとした交流も生まれている。

⑤まさか返事が届くと思っていた生徒達は、返事を受け取ると、満面の笑みを浮かべ喜んでいる。昨年の様子を知らせると、「年賀状をもっと書きたい」という生徒も出るほどである。また、初めてハガキを書く生徒もあり、良い学習の機会ともなっている。

⑥必要経費は、「家庭クラブ会費」の中から支出しているが、学校によっては必要経費の捻出場所がないこともあり得る。その際には、地域の社会福祉協

議会へ相談すると何らかの方法を照会してもらえる場合もある。

3. 「学校家庭クラブ活動」における実践例

以下は、「家庭一般」の中での「学校家庭クラブ活動」の実践事例である。授業時以外、全校生徒を対象として行ってきたものである（紙面の都合上、項目のみ掲載）。

また、学校家庭クラブ活動の成果をまとめ、青森県高等学校家庭クラブ連盟研究発表大会、東北ブロック高等学校家庭クラブ連盟研究発表大会において、研究発表をしてきた。

研究発表の形に仕上げることは、生徒にとっても教師にとっても多大な負担がかかるところである。しかし、多くの時間を共有することにより、先輩後輩・生徒教師間の認識や結びつきが強いものとなり、多くの感情を経験できる教育効果もある。

- 牛乳パック・アルミ缶回収運動（放課後）
- 母の日のプレゼント講習会（放課後）
- バレンタインチョコレート講習会（放課後）
- 独居老人宅清掃奉仕及び交流活動（長期休業中）
- 老人健康保健施設研修（長期休業中）
- 河川水質調査（長期休業中）
- 花いっぱい運動（6月上旬の休日）
- 児童館体験研修（長期休業中）



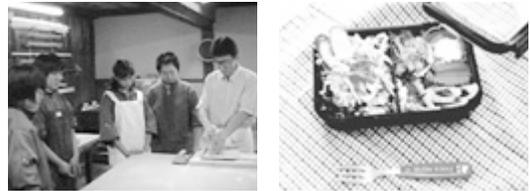
4. 科目「食物」「被服」「保育」における実践例

「食物」

- 全国高等学校家庭科技術検定食物調理3級
- 全国高等学校家庭科技術検定食物調理2級
- 全国高等学校家庭科技術検定食物調理1級



- 食品製造工場見学研修
- 「そば打ち」体験実習
- 郷土料理講習会



- 高校生のお弁当講習会（旧総合技術センター）
- 高校生のお弁当コンテスト（旧総合技術センター）

「被服」

- 全国高等学校家庭科技術検定被服製作3級
- 全国高等学校家庭科技術検定被服2級（洋服）
- 全国高等学校家庭科技術検定被服2級（和服）

「保育」

- 乳幼児健診見学研修
- 妊婦栄養指導見学研修
- 妊婦健診見学研修
- 幼稚園体験研修

5. 家庭科教育とインターネット活用について

〈家庭科関連ホームページ作成・公開〉

インターネットの急速な普及に伴い、「家庭科教育」における情報発信を目指し、個人的立場として、Webページを1997年（平成9年）年に作成・公開し、現在に至る。

〈家庭科関連メーリングリスト立ち上げ〉

また、全国の家家庭科教育関係者の情報交換をねらいとし、2000年（平成12年）3月に「家庭科教育関連メーリングリスト」*1を立ち上げた。

現在の登録者は全国で73名（中・高校家庭科教員、大学教員、教育行政担当者、出版関係者）であり、日頃の家庭科の授業・教材、家庭科教育についてのあり方等の意見交換がされている。

日々、家庭科教育に対する情報の欲求を感じる各界の方々が次々にこのメーリングリストに参加して来ており、参加登録者は増大する傾向にある。

メーリングリストの機能を活かし、「テスト問題交換プロジェクト」と称した評価問題作成の情報交換はまた好評を得た。他人の作成した評価問題を知る機会は少ないため、今後の評価問題作成の参考に大いに役立っているようである。

家庭科教育におけるコンピュータの利用については、比較的早い時期から取り組み、連名で論文を発表させていただいた。

<家庭科教育とインターネット活用事例>

インターネットの活用については、日頃の教材研究をはじめさまざまな情報収集のため欠かせないものとなっている。

また、過日全国の教育機関に配布された日本教育工学会（文部科学省企画）の「授業実践事例CD-ROM」には、家庭科の授業で使用可能な事例として「インターネット検索で献立作成！」を掲載していただいた。



6. まとめ

限られた家庭科の授業時間において、扱う分野が広いため、教材の精選・指導内容等には工夫が必要である。教科書中心の授業の時には、社会的な事象がわかるような資料や実物教材等を活用し、家庭生活のシミュレーションを通して、各自のあるべき姿を見出せるよう工夫をしている。

また、方向性を示すような発問や説明をせず、各自の主體的な考えを導き出せるよう、常に心掛けている。生活体験の希薄な生徒らが、これからの家庭生活のあり方を少しでも考えられる機会になれば幸いである。

生徒の実態・地域の状況等を踏まえ、指導内容との関連を図りながら、より体験的総合的学習を設定することは、外部機関との連絡調整や文書発送などの煩雑な処理が増える。しかし、このような学習の中での生徒の変化・変容には目を見張るものがあり、秘められたその可能性は大事にしなければならない。

基礎基本を押さえながら、体験的総合的に学習することの意義を活かし、特色ある家庭科の授業づくりを今後も継続していきたい。

※1

- ・「家庭科教育関連メーリングリスト」

1人の発言者がメール形式で発言をすると、参加登録者全員に同一情報が同時に配信されるシステム。（参加希望者は suwa@hi-net.ne.jp までご連絡を）



「家庭科準備室」(Web Site)

URL <http://www.hi-net.ne.jp/suwa>